

の勇敢熱心に比してのみ日蓮の當時を思ひ得るなり。

有力なる信徒を得たり

彼は路傍説教に依りて多くの有力なる信徒を得たり、四條頼基なり、進士春善なり、工藤吉隆なり、池上宗仲なり、荏原義宗なり、南郷實長なり、皆な忠武を以て聞へし東國異教の武士なり、北條時代の日本人は今人の如く宗教に冷淡ならざりしなり、彼等は身は豪族の中に算へられ政府樞要の位置を占めしものなりと雖も、路傍説教に耳を時て、一度び眞理と信するに至れば世の嘲弄誹謗を顧みず、直に彼等の信仰を表白するに躊躇せざりしなり、試に思へ、工藤吉隆は房州天津の領主なりし事を、四條頼基は北條の一門江馬遠江守の近臣たりし事を、池上宗仲は東國屈指の豪族たりし事を、而して日蓮の恩人にして終に彼に信服するに至りし富木播磨守胤繼は諸侯の一人なりし事を、是等が名越の貧僧を信じ彼に師事するに至りしなり、日蓮の豪と邁とは感ずるに餘りあり、然れども是等豪直の士の行爲は我邦の今日の社會に於て求めんと欲して能はざる所、余輩の祖先も一時は眞面目なる宗教家なりしなり、彼等に不人望なる味方に組するの勇氣ありしなり、彼等は交際社會の批評を恐れざりし、彼等は宗教的

熱心を以て耻となさざりし、明治の日本には鐵道あり、電信あり、シヤムペーン酒あり、花骨牌あり、然れども建長文永時代の誠實熱心眞面目は其封建政治と共に今は全く失せて迹なし、今日は批評の時代なり、宗教哲學時代なり、「新神學時代」なり、然れど名譽生命を悉く賭して一宗教に歸依するが如きは今人の敢てせざる所、僧日蓮は狂人なり、彼の徒弟は迷信家なり、如何となれば彼等は今日の眼鏡的批評學者の如く冷淡にして無情ならざりしが故に、彼等は眞面目なりしが故に、彼等は實に誠に宗教を信ぜしが故に。

直接傳道に従事すること六年、彼の信徒の益増加するに及びて彼の確信は益強きを加へたり、彼の心中に十數年間存せし彼の假説は今生靈の上に試みられて其實裏を結ぶに至れり、諸宗無得道説佛法惟一説は今多くの賛同者を得て全く疑ふべからざるに至れり、時に康元元年關東に大洪水あり、其年六月十四日には鶴ヶ岡八幡宮の社震動せり、同日白晝に飛星を見たり、翌正嘉元年には月蝕日蝕共に異例なり、五月十八日大地震と共に海水泥に變じたり、夏旱魃甚しく田畑涸乾て野に一株の生草なし、八

天變
地異

月再び地大に震ひ人畜死傷夥し、十月天に五色の雲現はれ鋒の如き電光八方に散亂す、翌正嘉二年奇異の現象尙ほ息まず、五月廿八日彗星現はれ一天の星皆な光を奪はる、春悪疫流行し秋大風大洪水あり、諸國の大飢饉は延て翌正元元年に涉り、鎌倉市内に人其兒を啖ふものあるに至る、是れ何等の徴候ぞ、日蓮未だ氣象學を識らず、地質天文の諸學は彼の未だ夢にもせざる所、異現を解するに彼は單に彼の宗教あるのみ、故に彼も亦た多くの宗教熱心家と同じく自然的現象の註釋を古代聖經の中に求めんとせり、彼は彼の凡ての經文學に徴して自然的異變の意味を探究せり、而して尙も彼の考察を確めんため彼は弟子日照を從へ、駿州富士郡岩本實相寺に至り、其經藏に就て彼の意見に經典的證據を求めたり、而して彼の默思と考察との結果は有名なる立正安國論と成れり、是れ日本文學中惟一の書、之に比すべきものは世界文學中伊國サポナローラの著「^{ハカイ}哈基の預言の註釋」あるのみ、二者同一の眼光と同一の攻究法を以て自然的現象と社會的變動を論ぜしもの、歴史家シモンドが彼れの有名なる「伊太利文學復興史」に於てサポナローラの著を評して「是れ心理學的異象 (A psychological phenome

立正安國論

non)なり」と云ひしは亦た立正安國論の適評なるべし。

立正安國論の要たる先づ金剛明經大集經仁王經藥師經の四經に據て、災異の來るは世の正に背き人の惡に歸し、善神は去り正法は蔽はるゝより惡魔厲鬼の來つて爲す所なることを明し、次に法然が選擇集を破斥して正法を蔽ふものなることを辨じ、密に淨土を冀ひて三部經の他の餘經をば捨閉閣抛の四字に付するの甚しく非なるを喝叱し、次に正法を誇るの大罪過なるを説き、次に法華經の眞實教大乘教最勝教たるを説き結末に法華を尊信し念佛を抛下せずんば災異は今よりも猶ほ多く來らんことを示して終るまでを問答跡に書き綴りしなり、(幸田露伴氏の「少年文學」に於ける明晰なる解剖に依る)。

是れ日蓮の論法、中古時代の歐羅巴人の論法、即ち所謂「依法不依人」的論法にして科學以前の人には惟一の論法なりしなり、「是れ我が言にあらざして釋迦牟尼世尊金口の佛説なり」と、古代誠實の士は如斯論法を以て満足せしなり、日蓮は自然的災異は日本人が彼の尊崇する法華經を奉戴せざるが故なりと論定せり、而して猶ほ「自界叛逆難」

心靈的本能

と「他國侵逼難」とは彼等の不信の結果として彼等の頭上に落ち來らんとすと預言せり、余輩は彼の中古的教育が典經以外に自然的現象を解することを彼に許さざりしを惜む、然れども日蓮は全く誤らざりし、學術の進歩を以て誇稱する吾人は彼の非科學的なりしを笑ふと同時に彼に吾人の有せざる心スピリチュアルインセンシブ靈的本能の存せし事を許さざるべからず。

自然界は心靈界と全く域を異にするものにあらず、道德的源因は自然的結果として現はれ、人は客觀的現象を以て主觀的動靜を察するを得べし、此觀念たる人類の有する本能の一にして科學の進歩は容易に之を吾人の腦裡より排除する能はず。

天災と罪惡

吾人目前の災異にして現然たる罪惡の結果たるものは枚擧するに遑あらず、旱魃と洪水とは常に相伴ふて來るもの、而して二者共に山林の濫伐に基く事は已に何人も承認する所ならずや、洪水は人類の貪慾が他人に率先せられん事を恐れて先を争ふて山野の林裝を剝奪するより來るものなり、洪水と罪惡との關係は實に最も近きものなり、疫癘と道德との關係に至ては更に明瞭緻密なるもの、勿論之に罹るものは皆な悉く其犯せし罪の刑罰に依ると言ふを得ず、然れども社會として國家として人類として之に惱さるゝは現然たる道德的源因よりする事は理の最も睹易きものなり、幾多の火災は不平怨恨嫉妬より起りしよ、幾多の饑饉は非政の結果なるよ、人は災害を已に歸せずして天を恨む、然れども災害の多分は人爲を以て排除し得べきものなり。

道德的に災害を減少す

日本の颶風は其地理學上の位地に因るものなり、其震災は其地質的構造の然らしむる所なり、吾人は改悔懺悔するも是等災害より免るべきに非らずとせん。

地震颶風は道德的に避くるを得ず、然れども道德的に其災害を減少し得るなり、恐怖の念は苦痛の極なり、恐怖は不幸を張大ならしむるもの、恐怖去るに及んで人生の苦痛の過半以上は去りしなり、而して恐怖は罪惡の直接の結果なり、恐怖の民は災害を最も多く感ずるものなり、故に仁政行はれ民各其天職に安んずる時は熒星顯るゝと雖も之に意を留むるものなく、震災の犯す所となるも損傷を感ずる掛し、古昔より噴火震災が罪惡に沈める社界を警醒せし實例甚だ多し、有名なるソドム、ゴモラの兩市が陥落して今日の「死海」と成りし事、ベスピアス山の噴裂に依てポンペイ、ヘルクユレ

「ニエム」の填塞せし事、千七百五十五年のリスボン府の大地震、近くは歐洲賭博の中心なるリビエラ沿岸の破壊、是等は地動的災害が罪惡に伴ひ來りし著名なる實例なり、余輩は天が殊別に積惡の民に災害を下し給ふや否やを知らず、然れども天災は刑罰として積惡の民に最も強く感ぜらるゝの一事は明言するに躊躇せざるなり。

客觀的に主觀的に災害は日本人民を惱ませり、日蓮は詩人にして科學者に非らず（宗教家は概ね然り）、彼の道德は佛教なり、彼の佛教は法華經なり、故に自然的災害を以て法華經流布の障害より來りしものとなせり、是れ彼の前提プレミッスより來る自然の結論なり、誤謬は彼の前提にありて彼の論法にあらざりしなり、災害は道德的原因の結果として見るを得べし、或る意味より言へば吾人改悔の爲め天の送りし警戒と見て可なり、然れども是を以て法華經流布の妨害より來りしものとなせしは日蓮の偏見なり、恰も基督教徒が國難の起るを以て其宗教の傳播せざるが故なりとし、新教徒が伊國の震災を以て天主教徒の跋扈に歸するが如し、立正安國論は日蓮の深と隘とを同時に示すもの、

深と隘

「國は法に依て榮（法は人に依て立つ）、是れ何人も抗言する事能はざる所、正法に背

けばその國に七難起る」是れイザヤもエレミヤもルーテルもカントもソクラテスも承認する所、然れども正法（真理）を以て彼の法華經と同意義ならしめし事は彼の狹隘と無學と固執とを示せり。

元寇豫言

日蓮の元寇豫言は屢非難を受けしもの、其當否は純粹歴史の問題にして余輩の爰に論ぜんと欲する所に非らず、然れども日蓮の性を以て異國の侵迫を前視せりとは余輩の信ずるに躊躇せざる所なり、そは感能過敏彼の如きものが將來を未發に前知せし事は其例決して尠なからざればなり、豫知は詩人特有の感能なり、詩人ゲーテに其著しく發達せし事は彼の記録に存して明なり、加奈太オントリオの入醫學博士アール、エム、パッシン氏曾て Cosmic consciousness（宇宙的感能）てふ論題に付て彼の研究の結果を某學會に報じたる中に、彼は人心が發達して終に宇宙の事物を未發に知覺し得るに至るを述べたり、而して其實例を挙げ、信徒保羅、シエークスピア、佛の小説家バルザック（Honore de Balzac）、獨の神秘學者ベーメー（Jacob Boehme）、英の畫工詩人ウヰリヤム、ブレイク等を以て最著名なる者となせり、瑞典國の神秘的哲人スウヰデンボル

東洋のサボ
ナローラ

彼の未來豫言が能く適中して彼の學敵哲學者カントを驚かせし事は能く知れ渡りたる事實なり、然れども僧日蓮の豫言と最も相似寄りたるものは伊國フロレンスの宗教改革者サボナローラの豫言なり、彼は彼の國人の罪惡を責めて其現罰として他國の入冠あらん事を豫言せり、而して彼の宣言果して違はず、千四百九十四年佛王カール第八世の攻入を見たり、是れ何人も疑ふ可からざる歴史上の事實なり、日蓮サボナローラ兩雄の相似たるは此一事に止まらず、激熱なる彼等の特性、兇語に富める彼等の辯舌、燃ゆるが如き彼等の誠實、抗す可からざる彼等の勇氣、日蓮を東洋のルーテルと稱するは不可なり、日蓮は東洋のサボナローラと稱すべし。

日蓮の元冠豫言は比類なき心理的現象に非らず、然れども彼が是を以て法華經尊奉を國民に強ひしは彼の偏見妄想と言はざるを得ず、余輩の已に論述せしが如く彼は已に彼の前提に於て誤まれり、超自然的の彼の天才は彼の智識欠乏の爲に屢曲用せられたり。

(四)

陳腐僧侶と
政治家

立正安國論は日蓮を時の政治と衝突せしめたり、彼は今は宗教に政敵を加へたり、陳腐僧侶と政治家とは恒に相提擧して革新家に當るものなり、兩者の存在と安逸とは社會の奴隸的服従を要す、革新家は彼等の最も厭ふ所、盲啞的に彼等を尊信拜崇するものを彼等は指して忠臣と稱し、信心家と呼び、彼等の迷信關愚に逆ひ、彼等の拙政劣略に喙を容るゝものを彼等は異端と呼び、不忠と名づく、日蓮に真觀と時宗ありしは基督にカヤフハスとピラトあり、モハメッドにコレーシエの族あり、ルーテルに法皇レオ第十世と獨帝カール第五世ありしが如し、真正の革新家として此二種の讐敵を有せざるはなし、海弱なる平凡人間は敵なきを以て善人の徴候となす、曰く「彼は何人にも愛せられたり」と、彼等は大きな善人の資格を知らず、大敵を有せざる人に余輩は巨人の名稱を附せず。」

文應元年(一二六〇)安國論を執權北條時頼に納れてより文永十一年(一二七四)佐渡流竄を赦されし迄十四年間は特に日蓮の迫害時代なりし、彼れ一生の四大厄難なる小松原の襲撃、龍の口の劔難、伊豆佐渡の謫流は實に此時代にありき、激烈なる迫害此の長時間に亘りて日蓮の大望計に些少の撓風をも加ふる能はず、法華經勸持品は彼の特愛の一卷なりしが如し、彼は笞杖謫流劔難の彼の身に迫り來るを見て法華經の使徒たる彼の天職を益々確認するに至れり、如何に太古の殉教者の生涯が彼を幽裡に慰めしかは彼の書翰の一に見へたり、

付法藏二十五人は佛を除き奉りては皆な佛のかねて記し置き玉へる權者なり、其中第十四の提婆菩薩は外道に殺され、第二十五の師子尊者は檀彌栗王に頸を刎ぬられ、其他佛駄密多龍樹菩薩なども多くの難に値へり……正像猶かくの如し、中國又然り、これは邊土なり末法の始なり、かゝる事あるべしとは先に思ひ定めて期をこそ待ち候へつれ云々、

是れ同じく初代基督信徒の慰籍なりしなり、

我れ更に何を言はんや、若しキテオン、バラク並にサムソン、イビダ、ダビデ並にサムエル及預言者等の言を言はんには時足らざる也……或人は嬉笑を受け鞭打たれ、縲紲と囹圄の苦を受け、石にて擲たれ、鋸にてひかれ、火にて焼かれ、刃にて殺され綿羊と山羊の皮を衣て經あるき、究乏して艱苦めり、世は彼等を居くに堪へず、彼等は曠野と山と地の洞の穴とに周流たり、……是故に我儕……耐忍て我儕の前に置かれたる馳場を趨るべし、

日蓮を以て詭計詐偽の徒と見做すものは深く彼を識らざる人にあらざれば自身彼の遷近せし艱難に會せざりし人なり、偽善者は十五年間の縲紲周流に忍ぶ能はず、利慾は社會の大勢力なりと雖も誠實の堅忍不拔なるに及ばず、艱難は眞偽を判するため自然の淘汰法なり、余輩日蓮を嘲罵する人を見るに多くは是れ倫安的腐儒の輩、宗教學者にして宗教家ならざるもの、基督教の聖書に所謂「未だ血を以て争ひし事なき人」なり。

日蓮は能く迫害に堪へしのみならず彼は能く迫害に勝てり、謫流二回、彼は謫地を彼

の宗義に教化せり、伊東在留の三年は伊豆一ヶ國を彼の宗領に加へたり、佐波流寓五年、彼は亦た越佐を得たり、彼に接して彼に化せられざるは稀なり、彼を放つは疫癘を放つが如く危し、彼が脚迹を遣せし處は彼の教義に感染せざるはなく、如何なる權力制裁と雖も彼の傳教者たるを妨ぐるを得ざりき。

宗門弘通の
免許下る

文永十一年三月廿六日彼は赦免を復て鎌倉に歸れり、全五月二日宗門弘通の免許は下りぬ、時に日蓮齡已に五旬を超へ、彼の確信は天下の政權に勝てり、社會の尊信と畏敬とは今は彼の身上に鍾れり、余輩は云ふ、日蓮宗の危期は龍ノ口に非らずして實に宗門公許の此時にありしと、僧日蓮の大は再び著しく此時に顯れたり、彼は權門に倚り頼むの愚と險とを知れり、彼は良觀良忠道隆の輩が權門に媚ふるの醜態を目撃せり、彼は彼の身に政教協同の毒害を受けたり、政府の許可を得るを以て最上の特權と見做す日本人中惟り日蓮は之を輕視せり、執權北條氏は日蓮の厚意を求めて日蓮は北條氏を卻けたり、宗教家たるもの、自信と權幕とは斯くあらまほし、法王レオ三世が蠻王アラリックの羅馬侵人を拒みし、アムブロースが大帝セオドシユスを擁してミランの

身延山に退
隠す

教堂に入るを許さざりし、サボナローラが佛王カールを叱咤してフロレンス城より退去を命ぜし、シヨン、ノツクスがマリア女王を面責せし、皆な宗教家の好例として傳へらる、我邦の宗教家は動もすれば政權の庇保に與かりしを以て跨る、知らずや是なん我邦に於ける佛教衰退の大原因なるを、帝王の帝王(Imperium in imperio)、監督の監督(Episcopus Episcoporum)是れ真正なる宗教家の位置なり、宗教政權に依り頼んで腐敗せざるはなし、日本の佛法然り、西洋の基督教然り、日蓮は執權時宗の黒印ある免許狀を棄却して身延の草庵に隱退せり。

隱退後の日蓮に就ては余輩の多言を要せず、彼を野望的失意家と見做すものは身延に於ける彼の生涯を學ぶべし、住居は柱十二本三間四面茅屋の草堂、食は藜あしかげの羹野菜の鹽煮粟稗に乾蕨を炊き雜へたるもの、歸依檀越の布施を受けず、法弟と共に鋤を取り粟を蒔き菜を植へ樵栗等の山菓を畜へ以て無慾の彼の欠を補へり、彼の快樂は全く心靈的なりしなり、

たち渡る身のうき雲も晴れぬべし

妙の御法の鷲の山風

宗教家は貧居を撰ぶ

貧居は宗教家の義務に非らず、然れども眞實なる宗教家は貧居を撰ぶものなり、そは彼は内に足りて外に需むるの要なければなり、否外に滿て内に渴するを懼るればなり、モハメツドが西亞の半を切り従へて猶ほ自ら衣服を繕ひしか如き、聖ペルナードが貧を呼て「我の最愛の姉妹」と云ひしが如き、ルーテルの大なるも時々日用品の欠乏を告げしが如き、僧日蓮も全一の境遇と云はざるを得ず、幸福なる「ホーム」を作るを稱して肉躰快樂を得るに汲々たる宜教師と彼等の信從、身は高貴も及ばざる榮華に居て如來の化現なりと自ら欺く佛家、宗教末世の現象、是れを愁歎の極と稱せずして何とか稱せん、西語に曰く Church is Purest when it is poorest (教會は最も貧なる時に最も清し)と、日蓮の貧居は實に敬すべきに非らずや、汝玻璃室内に在て安樂椅子上に宗教問題を考究するものよ、僧日蓮は汝の會得外に在り。

弘安五年(一二八二)十月十三日彼は武州池上に入滅せり、彼れ失せて以來日本國に大宗教家出です、彼は最終最大のものなり、我邦の佛數は十三世紀の終に當て其絶頂に達せり、

誠實と忍耐と勇氣と確信と先見とに於ては余輩は我國の宗教歴史上日蓮と比すべきものあるを見ず、彼に眞正の宗教的知覺ありし、宗教を以て治國平天下の一方便と見做すもの多き我國人中日蓮のみは宗教的に眞面目なりし、彼の敵人は彼を以て穢多の子なりとせり、其然るや否やは余輩の知る所に非らずと雖も彼は純然たる一平民たりしは彼自ら表白する所なり、彼は彼の天職の高きを識ると同時に彼の社會的身分の下劣なるを認めて耻ぢざりし、「日蓮は日本國東夷東條安房の國海邊の旃陀羅の子」なりとは彼が自ら書せし所、彼に若し貴むべきあれば是れ彼の遺傳の故に非らずして全く世尊釋迦如來の救命に依る、

我はかひなき凡僧なれども法華經を弘むれば釋尊の御使なり、梵天帝釋も我が左右に事へ、日天月天も我が前後を守り、天照八幡も頭を垂れて我を敬ふべし、

是れ彼が本間重遠に語りし所、實に彼の宗教的生命力の泉源たりしなり、

人よりに非らず、亦た人に由らず、イエス、キリストと彼を死より甦へらし、父な

ホーロの例

る神に由て立てられたる使徒パウロ、

とは保羅が自身の威嚴を告白せしと言なり、

大陽我の右に立ち、大陰我の左に立ち、我に沈黙を命ずるとも我は従はじ

モハメットの例

とはモハメットが彼の叔父アブダレフに答へし言なり、大宗教家に悉く此自念ありし、

即ち人権以上より来る勅命を領し之れに事ふるを以て最大義務と信ぜし事なり、日蓮

又た言へり、

日本國の萬民は悪まば悪め、釋迦多寶十方の諸佛にだに譽られざるらせば其面目よ
ろこび身に餘れり

と、是れ宗教家が事に當る時の惟一の慰藉なり、世の褻貶に眼を留め其譏讒を事とす
るが如きものは宗教家の籍に身を列すべからず、社會の贊同を獲んが爲めに汝々とし
て止まざる今日の宗教家は日に日蓮に學ぶ所ありて可なり。

日蓮の誠實は疑ふべきに非らず、然れども誠實の意は完全の意に非らずとは余輩の已
に論述せし所なり、而して若し日蓮の欠點を指示すれば一にして足らざるべし。

彼の欠點

彼の欠乏は寛裕の美德なかりしとなり、「諸宗無得道墮地獄」は彼の説法中最も聞き
悪き恒言なり、彼は「折伏」と稱して他宗攻撃を専らとせり、彼の宗義は多くは消極的な
りし、彼は法華經を盛り立てんが爲に他宗の玷缺を剝露するの必要を感じ、是れ彼の
熱心の凝固して此に至りしものなりとするも慥に彼の狹隘を示し彼も亦た彼の時代と
人種の上に逍遙すると能はざりしを表せり、我の説を固持すると同時に他人の美と長
とを識認し得る是を寛裕といふ、我も宇宙の一部分なれば我に獨特の觀あるは當然な
り、然れども人たる我に抱全的世界觀ありとなすは誤認の最も大なるものなり、天我
を愛するが如く人をも愛す、我に一眞理を供するが如く人にも供す、我は全眞理を抱
合すとは宇宙の主宰を除くの外は何人も云ふ能はざるの言なり、日蓮の確信は敬すべ
し、彼の「折伏」非謗は傲ふ可からず。

基督教の特
産物

宗教的寛裕たる余輩は是を基督教の特産物と云はざるを得ず、而して歐米諸國に於け
る該精神の發達は實に僅々過去百年間にありたり、自由信仰主義に則る基督の教訓す
ら千八百年の永き其の信徒たるもの、内に此美德を發揚するを得ざりき、然れども世

が十八世紀に入りてより寛裕の精神は頓に勃興し、レツシングは彼の有名なる劇作 Nathan der Weise (智者ナタン) を以て痛く時の神學者流の狹量を駁し、歐洲人の最も忌み嫌ふ猶太人を捉へ來り、其美質を稱揚して異教人種の高徳を贊せり、ツヨンハワルドの慈善事業、リヒンクストンの亞非利加傳道、ウヰルバフオース、カリソンの奴隸廢止運動は全く此宇宙的推察の感念より來りしものなり、佛のラユーデヤ (Laco daie) は熱心なる天主教徒して宗教的寛裕を賞揚し、英のテニソンは超宗派的の句調を以て直ちに人類の普通感情に訴へ、米のホヰツタイヤ、ローエルは各自斷乎たる獨特の確信を有しながら對他的寛裕の美を謳へり、英のヂィンスタンレー、米の監督フヰリツプス、ブルツクスは大西洋の兩岸に於ける寛裕論の使徒として現はれたり、宗派論未だ全く西洋諸國に絶えず、然れども己れの宗派外の人を目して無得道墮地獄となすものは今は中古的妄想者として彼等の社會に容れられざるに至れり。

寛裕の欠乏は宗派撲滅の目的を以て起ちし日蓮をして最も頑固なる宗派の設立者たらしめたり、日蓮の精神は實に宗派的精神なりし、何となれば宗派なるものは其奉ず

宗教的精神

る主義を以て無比惟一のものと見做より來るものなればなり、ラユーデヤ曰く「寛裕とは他人の確信に尊敬を置く事なり」と、日蓮は他人の確信を賤しめたり、寛裕殆んど全く彼にあるなし、而して日蓮の信徒は多く其師に倣へり、所謂「固まり法華」なるものは我國の宗教家中最も頑固なる旁門者なり。

眞理の兩面

確信欠乏して吾人に氣骨なし、寛裕欠乏して吾人に雅量なし、二者は眞理の兩面なり、反對性の如くにして同一物の兩性なり、日蓮は他の多くの宗教熱心家と共に確信の一に著しく發達して寛裕の方面に萎縮せり、完全なる宗教は兩面の發達にあり、吾人は己れに足りて人を恕すべし、眞理は宇宙大なり、我れ一人の掩ふべきに非らず、然れども我も宇宙の一部分なり、我の立つ所は我の有なり、他人をして之を侵さしむべからず、是れ寛裕の哲理なり、僧日蓮は此理を解せざりしが如し。

佛教改革

日本に於ける佛教改革は日蓮の目的たりしなり、而して余輩は信ず彼はその目的の一部分を達せりと、彼は厭世的なる佛教をして實用的たらしめたり、彼は印度の宗教なる佛教を日本的たらしめたり、彼は僧侶的佛教を平民的たらしめたり、我國の宗教歴

史に於ける日蓮の功績は決して尠少なからず。

然れども彼の宗教改革は中途にして止みぬ、彼れ死してより六百年後の今日の日蓮宗は他の佛法諸宗と運命を共にせり、日蓮の遠望は先づ日本を教化し而る後朝鮮支那に弘通して終に釋迦の本土なる印度に及ぼさんとするにありき、而して偶々日持聖人の如きありて法華經を異域に傳ふるものありしと雖も日蓮宗は日本の宗教として終り、日本人少數(比較的)の宗教として終はんぬ、而かのみならず彼れ日蓮が大言して「高十六萬八千仞の須彌山を剝回めて硯となし、大千世界の草の葉を筆に結び、大海を硯水として之を記すとも書き盡し難し」と讚め立てたる法華經の功徳も今は彼の宗教に歸依するもの、普通道徳をも維持し得ず、池上の聖地は穢汚男女の祈願を込むる處となり、或は清正公崇拜の迷信と化して姪夫姪婦の歸依する所となり、或は蓮門教會となりて明治の昭代に關を生せり、日蓮宗は宗教的熱心を喚起せしも倫理的に日本を教化せず、日蓮の改革事業は實に教法的たるに止て倫理的たるに及ばざりし、彼は法を崇むるの余り法典崇拜家(Bibliolater)と成りて止みぬ、彼の意勿論法の實行を忽にする

る非ざりしは明なり、彼が弟子日朗を讚賞するの語に曰く、

世間に法華經を讀は口ばかり詞ばかりは讀とも心に讀まず、心に讀めども身に讀まず、貴邊(日朗を指す)身と心とに讀み給へば父母並に一切衆生を助け給ふべき御身なり、

由此觀之れば日蓮在世の時早や已に「口ばかり詞ばかり」に法華經を讀むもの多かりしを知るべし、法華經の功徳は是を身に實行するに非ざれば得る能はずとは普通感念に照して明なり、然るに此實行的法華經に重を置かずして經典其物を尊戴し、其名を唱ふるを以て善行に價するものと見做すに至りしは誤謬の最も甚しきものと謂はざるを得ず、南無妙法蓮華經なる題目は門徒の南無阿彌陀佛、天主教徒の「アベアリア」と均しく倫理的に一の價値を有せず、法然上人の念佛を排擧して之に換ふるに彼の發明の題目を以てせしは一の迷信を以て他の迷信に換へしに過ぎず、是れ日蓮の改革事業の根本的たらざりしを證し、其早く腐敗の途に就きし理由なりと言はざるを得ず、マ

ホントの改革サボナローラの改革の稍や健全なりし理由は全く彼等が宗教事業に倫

經典崇拜は
偶像崇拜に
優る

理的分子の多かりしが故なりとす。
然れども經典崇拜は偶像崇拜に優る、若し人類の技工にして拜すべきものありとすれば書物は最も崇拜の價値を有するものなり、故に木石を拜するを止めて經典を拜するに至り人に依らずして法に依るに至りしは宗教的思惟上非常の進歩と謂はざるを得ず、モハンマドが天隕石の崇拜を痛擧して之れに換ふるに「コーラン」を以てせしが如き、ルーテルが天主教のマリア崇拜を棄却して「バイブル」に縋りしが如き、皆な進歩的行爲と言はざるを得ず、日蓮は木石崇拜の佛法を去て經典崇拜の佛法を造り出だせり、彼は改新家の名を負ふて可なり。

然り吾人何人か完全なる改革者たり得る者ぞ、人生の墓なき彼は進歩に歩一步を加へて去るのみ、日蓮は彼の時代の宗教に彼の力量に應ずる改革を加へたり、今日の改革を要す、明治の改革は文永の改革に非らず、十九世紀の要する改革者と見做が故に日蓮に多くの瑕欠あり、然れども十三世紀の日本人としては余輩は彼に非常の敬慕の念を表す、彼は吾人に誠實の眞價値と實力とを教へたり、彼は獨立傳道の實例を與へた

純粹なる日
本的宗教家

り、日蓮上人を産せし日本はルーテル、サボナローラを出すに難からず、余輩は彼の如き人物の我國史に存するを感謝す、噴火山の如き激熱、地震の如き撼動力、詩人の最も高きもの、大和魂の靈化せしもの、日蓮は純粹なる日本の宗教家なり、彼に寛裕の分量を加へ、十九世紀の教育を施さば、彼の如きは今日の日本を化して世を化す界るに至るもの、リエンツ、ラコーデヤ、ルイコスートの如き人は日蓮の性に世界の大氣を吹き込みしものなり。

明治廿九年十二月三日印刷
明治廿九年十二月六日發行

定價二十錢

著者

名古屋市東瓦町
內村 鑑三

發行者

東京市京橋區日吉町四番地
渡邊 爲藏

印刷者

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
高田 乙三

印刷所

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
株式會社 秀英舍

發行所

東京市京橋區日吉町四番地
民友社



民友社書籍目録緒言

(明治二十九年十一月廿日改)

民友社出版の書籍雑誌は江湖の熱心なる愛讀を蒙り今や出版書日數は積んで百十餘種に上ほり中には十有五六版を重ね今尙發送衰へざるものあり是れ蓋し江湖諸君の愛顧此に至らしむるにあらざるはなし我社は此盛運の來迎に孤負せず益々奮つて有益有利有興味の著作を發刊するを勉めんとす

新刊として江湖に推薦するものは國民叢書第十册

徳富猪一郎著

經世小策

上各二十錢
下郵稅四錢

弘松宣枝著

坂本龍馬

定價十五錢
郵稅四錢

少年傳記叢書號外

吉田松陰文

定價十五錢
郵稅二錢

同

橫井小楠文

民友社編纂

第八國民小説

同

巢林子戯曲

英國ギボンズ原著日本水上梅彦譯述

英國産業史

渡邊修二郎著

内政外教衝突史

社會叢書第六冊

學問の應用

今世人物評傳叢書

第一山縣有朋

附渡邊國武岡本柳之助

下上

定價十二錢
郵稅十二錢

定價十五錢
郵稅四錢

各稅十八錢

上二十五錢
下十五錢
郵稅上四錢下二錢

定價廿五錢
郵稅四錢

定價二十錢
郵稅二十錢

定價十五錢
郵稅四錢

欠

MISSING

國民新聞

發行所

東京市京橋區
日吉町四番地

國民新聞社

定價一枚
一月 金二圓
三月 金四圓
半年 金七圓
一年 金十三圓
市外郵稅 一月 金十圓
三月 金十五圓
半年 金二十五圓
一年 金四十五圓

國民之友

每土曜
日發兌

定價一冊
二十冊 金十圓
半年 金五圓
市外郵稅 一年 金十圓

金六圓
金五圓
金四圓
金三圓
金二圓
金一圓
宛

英文國民之友

發行所

東京市京橋區
日吉町四番地

英文國民之友社

每月廿一日發兌
每部十二錢
友併讀者へは十錢
郵稅一圓一錢
一年前金壹圓二十錢
半年前金壹圓十錢
市外

家庭雜誌

發行所

東京市京橋區
日吉町四番地

家庭雜誌社

每月廿五日發兌
每部十二錢
友併讀者へは十錢
郵稅一圓一錢
一年前金壹圓二十錢
半年前金壹圓十錢
市外

民友社書籍雜誌直接賣捌所

(注意一) 此に列挙する賣捌店名は本社直接に取引する店又は特別に記入申込みありし分に限る
 (二) 故に全國に於て間接に賣捌する、店は此他に多數ありさ知らるべし
 (三) 間接賣捌所にて店名廣告申込みあれば追々掲出すべし
 (四) 賣捌所にして取引中事故あり停止又は拒絶したる店名は茲に其事故を掲載することあるべし

東京市神田區裏神保町	上田屋	大坂市備後町	吉岡書店
全 表神保町	東京堂	全 全	岡島新聞舖
全 京橋區尾張町	東海堂	京都市三條通富小路	便利利書房
全 館屋町	北隆館	全 佛光寺通り	東枝律書房
全 芝區櫻田本郷町	好明館	全 寺町通り	飯田信文堂
全 京橋區出雲町	警醒社書店	全 河原町	大田黒新聞舖
全 神田佐柄木町	田上書店	神戶市榮町	船井新聞助
全 京橋區尾張町新地	巖々堂	名古屋市本町	大瀬代
全 神田裏神保町	敬業社	全 玉屋町	川瀬觀支店
全 日本橋區新大坂町	鶴屋喜右衛門	福岡市博多	靜善館支店
全 横濱市太田町四丁目	國民新聞社支局		積善館支店

筑前久留米町	菊竹書店	全 白川町	奧村書店
熊本市新町	長崎次郎	青森縣青森町	鎌田商舖
全 南新坪井町	好本文堂	全 弘前市親方町	近松書店
熊本縣八代郡八代町	岩本理平堂	全 本町	今泉書店
全 菊池郡隈府町	時島昌平堂	北海道札幌南一條四三丁目	振上谷治吉
全 長崎市酒屋町	安中半三郎	全 室蘭港札幌通り	最上目屋
全 引地町	安中集榮堂	全 札幌南二條四三丁目	廣南重祐
仙臺市國分町	佐勘商書店	北海道小樽港	川南重祐
全 大町	木文商書店	豊前中津町	野依曆三
盛岡市中橋通	東善北支店	長野縣野澤町	岩下新聞舖
府島市鹽屋町	積善館支店	全 長野町	西澤喜太郎
越後水原町	西村六平店	全 岩村田町	文盛館
越後長岡凌四の町	目黒十六郎	上毛富岡	木田商舖
全 高田町	高橋書店	鹿兒島縣鹿兒島市	吉田幸兵衛
全 新潟市西堀通り	室直支店	全 全	金村光堂
全 村松町	原直支店	全 全	谷村新聞店
全 新發田町	梅の屋支店	茨城縣水海道町	阪本新聞店
全 小千谷	津野仁太郎	富山市東四十物町	新々堂
福島縣福島町	野口俊策堂	甲府市柳町	中田正堂

山梨縣勝沼仲町
 出雲松江市
 秋田市茶町
 羽後澤湯大町
 羽後酒田上壘町
 朝鮮仁川港
 石川縣小松
 同 金澤
 大阪心齋橋筋淡路町北へ入
 岡山市弓之町百三番邸
 大分縣大分町
 東京々橋區弓町
 靜岡市吳服町
 岡山市四大寺町
 美濃大垣本町
 越後新發田上町
 長野縣上水内郡長野町
 丸上商店
 松山市港町

正 榮 堂
 川 岡 清 助
 成 見 清 兵 衛
 齋 藤 勘 右 衛 門
 鈴 木 喜 入
 山 岡 書 店
 宇 都 宮 書 店
 同 支 店
 中 村 正 兵 衛
 周 營 堂
 甲 斐 治 平
 松 邑 孫 吉
 內 田 書 店
 山 本 金 正 堂
 渡 邊 商 會
 萬 松 堂 支 店
 齋 藤 祥 三 郎
 向 井 藏 次 郎

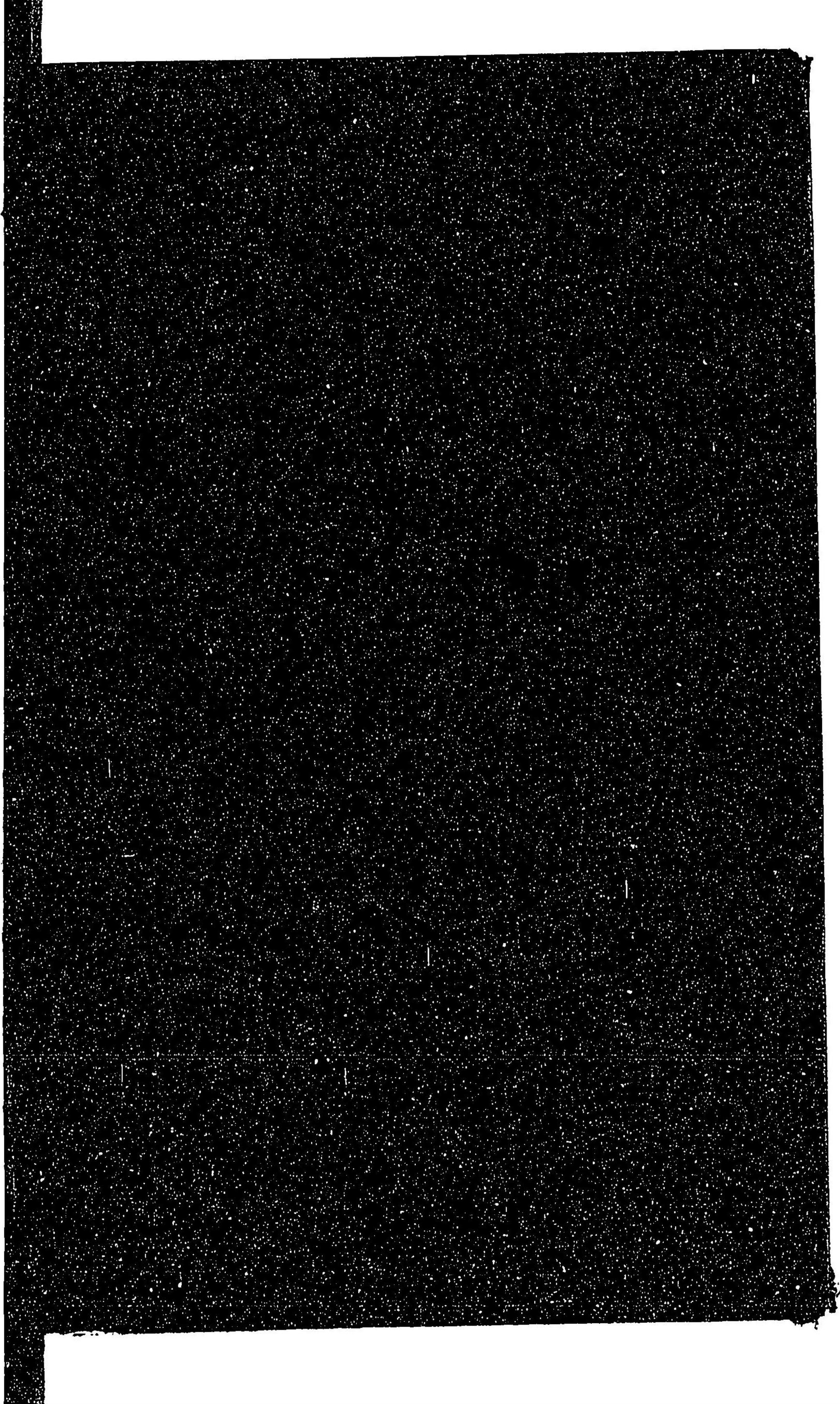
鳥取市上魚町
 大坂府豐能郡池田新町

山本吉太郎
 鹽川豐翠館

華

68

492



020611-000-9

68-492

警世雜著

内村 鑑三/著

M29

ABI-0426



